

2014（平成 26）年度
自己点検・評価報告書

桐朋学園大学

2014（平成26）年度 自己点検・評価報告書

目次

I. 点検項目について	2
II. 点検結果	3
1. 学生サービスに関して	
2. 国際交流と社会との連携について	
3. 学内意見聴取について	
III. 自己評価	9

I. 点検項目

「自己点検・評価委員会」は、「自己点検・評価委員会規程」及び「自己点検・評価実施規則」に則り、下記の「実施項目」の中から毎年6月末日までに当該年度の点検・評価項目を定め、12月末日までにその評価を実施し、その結果を集約して学内へ報告することとしている。

表1 桐朋学園大学音楽学部自己点検・評価実施規則第3条（実施項目）

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 教育研究の目的及び教育研究活動等における点検項目の作成及び点検に関すること。・ 教員組織及び施設設備等の点検項目の作成及び点検に関すること。・ 学生サービスその他の活動にかかわる点検項目の作成及び点検に関すること。・ 図書館を含む大学附属施設の活動にかかわる点検項目の作成及び点検に関すること。・ 管理運営にかかわる点検項目の作成及び点検に関すること。・ 国際交流、社会との連携等にかかわる点検項目の作成及び点検に関すること。・ 教育研究、管理運営等にかかわる外部評価の聴取及びその検討に関すること。・ 学内における意見聴取の結果及びその検討に関すること。・ 自己点検等の評価の実施に関すること。・ 自己点検・評価の結果報告書の作成及び公表に関すること。・ その他委員会が必要と認める事項に関すること。 |
|---|

2014年度は、「学生サービスに関して」「国際交流と社会との連携について」「学内における意見聴取について」の3項目を取り上げた。これらは、調布新キャンパスの開校等、大学を取り巻く環境の変化から見直しの必要があり、また2013年度までに取り上げられていなかった項目である。

点検に関わった担当者は、以下のとおりである。

- ・ 「学生サービスに関して」
責任者：大島幾雄
教員：谷茂樹、斎木隆、塚田吉幸、山本七雄、大橋浩子、合田香
事務：尾崎猛、鶴岡純子
- ・ 「国際交流と社会との連携について」
責任者：金子仁美
教員：梅津時比古、辰巳明子、加藤知子、蠣崎耕三、米田潔弘
事務：大島徹、島崎誠、広瀬公美子
- ・ 「学内における意見聴取について」
責任者：玉置善己
教員：沼野雄司、三上桂子、姫野雅子、西原稔、毛利伯郎、村上弦一郎
事務：碓光司、沼崎栄一

II. 点検結果

1. 学生サービスに関して

1.1 点検内容と結果

2014年度は、調布キャンパスの運用も始まり、これまでとは違う対応を迫られる場面も生じてきた。そこで、学生に対して十分なサービスが出来ているかどうかを点検した。

(1) 学生支援課関係

証明書の受付や学割等の発行、ロッカーや駐輪場の扱いなどが当初の懸案事項となったが、当初多少の混乱はあったものの3ヶ月の運用の中で少しずつ落ち着きつつある。

また「学生会館」の運営についても、春から深夜の不審者事件が2件ほど発生したこともあり、門限時間の見直しの必要がないかなど<学校として関わらない>という姿勢から<必要に応じて関わりを持つ>という方向転換を明確にした。その対応の1つとして、11月には学生生徒委員の立ち合いのもとに、大学生の学生会館居住者向けの説明会を実施し、生活ルール等への注意喚起もおこなった。

その他、キャンパス移転に伴い、学園祭をホールで開催するという方法をとった。こちらについても、1つの手法としてのモデルができた。

(2) 保健室・学生相談室

嘱託職員の看護師を1名採用することで、両キャンパスの保健室・学生相談室が連携を取りながら、多様な案件に対応することができている。

新たに対応に苦慮した案件は、調布キャンパスの新設に伴って発生しているシックハウスへの対応がある。教務課とも連携をとりながら、個々の状況に合わせた対応を行っている。これは今後仙川キャンパスの新校舎建築の際にも発生してくる問題でもあり、適切に対応していきたい。

(3) キャリア支援センター

昨今の「キャリア・デザイン」に対する関心の高まりと、就職・進学・留学等の支援を行う機関の重要性を鑑み、2014年4月1日より、桐朋学園大学にキャリア支援センターを発足させた。

進路相談は、個別やグループの形態で実施し、キャリア支援センター員と職員が対応している。年度当初に行った大学3年生を対象とした面接には、160名が参加。4月～12月中旬までの相談件数は68件にのぼった。

また、センター主催の講座（アウトリーチ講座—全6回、音楽キャリア支援講座—全4回、卒業生交流会、アーティストのためのキャリア・セミナーなど）や、企業説明会（年間7回）、就職関連講座（年間7回）など、積極的に講座も開催した。

(4) 教務課関連

教学的な取り組みとしては、桐朋学園芸術短期大学との授業連携を始めたことがある。学生の関心も高い、ミュージカルや演劇の分野の授業を開放してもらい、前期は66件の登録があった。

調布キャンパスの稼働開始に伴い、これまで窓口でしか手続が出来なかった夕方のレッスン室申込について、WEBフォームから申込ができる仕組みを導入した。今後のシステム導入へ向けての仮モデルで

もあるが、学生の利便性は多少向上したと思われる。

(5) 学生の意見聴取

2014年度オリエンテーション期間に、学生生活に関するアンケートが実施された(3.章に後述する)。その結果に<学生生活全般>についての満足度について、学年が上がるほど満足度が低くなる傾向があると報告されている。上級生ほど「学生サポート」の要望が多かったという結果もあり、学生が何を求めているのかは、常に注意深く耳を傾けていく必要があることを実感している。

調布キャンパス稼働時にホームページ上に「意見箱」を設置したが、今後も様々な方法をつかって学生の意見を集めて、それを運営に反映させていく方法は積極的に行いたい。

1.2 今後の課題

ここ数年は建築計画の関係もあり、その時々で状況が大きく変わっていくことが予想されている。一方で、課題も数多くあり、その中でその時々を判断しながら、的確な対応が必要となっている。多様な学生のニーズに応えていくために、教職員はこれまで以上に以下のような能力を求められていると考える。特に次の点には力を入れて取り組みたい。

・ 情報収集能力

学校というと毎年「同じことの繰り返し」という面がこれまではあったと思うが、建物の問題を見ても同じ状況にはならない。先を見据えて、どのようなことが必須になるかの情報を集め、それらを学内でいかに共通の情報として認識した上で、対応していけるかが1つの鍵となると考えている。

・ コミュニケーション能力

コミュニケーションツールが発達し、各種の手段で学生同士や教員とも連絡を取りやすくなった反面、対人関係の問題は複雑化しているとも言える。本学としても、今後サービスの一環として、各種のシステムの構築を行っていくことを目指していくが、一方でこれまでのアナログさも失ってはいけない部分もある。その時々に応じたコミュニケーション能力をまずは教職員が身につけた上で、学生にも適切な指導をしていきたい。

2. 国際交流および社会との連携について

2.1 点検内容と結果

(1) 国際交流について

2008年度からのサンタ・チェチーリア音楽院との交換留学生制度に加え、2014年度からはケルン音楽大学とも提携し、各大学に1名の学生を派遣した。両学生からは、大変貴重な経験であったとの報告を受けている。留学期間と派遣学生は、以下のとおりである。

- ・ 2014年10月1日～12月24日：研究科1年 ピアノ科 市川知佳 ケルン音楽大学
- ・ 2015年1月16日～3月31日：研究科1年 ピアノ科 青木ゆり サンタ・チェチーリア音楽院

(2) 調布市との連携

2014年度は、7月5~6日の「調布音楽祭」へ参加した。入場料無料・飲食可・0歳から入場できる場で演奏することで、地域市民との親交を深めることが出来た。また、主催である調布市文化・コミュニティ振興財団と協力して企画を遂行することで、地域に密着した形で音楽文化を広め、一般の方が広く音楽とふれる機会を提供し、音楽大学生として音楽と通じて社会に貢献できた。そのほかにも、調布市からの依頼には積極的に協力した。

(3) アウトリーチ活動

2014年度は2件のアウトリーチ活動を行った。

- ・ 5月25日、6月14日：調布音楽祭関連（調布市入間地域福士センター、調布駅前広場）でのアウトリーチ活動を行い、地域振興の一貫として音楽文化を広めた（参加市民：5月25日約40名、6月14日約30名）。
- ・ 2014年10月26日、11月16日：介護施設（レストヴィラ多摩川）でのアウトリーチ活動を行い、音楽を通じて社会福祉活動に貢献した（参加者：約50名）。

2.2 今後の課題

今回の点検で浮かび上がった課題点は以下のとおりである。

- ・ アウトリーチ活動
参加メンバーが固定する傾向が見えてきた。より多くの学生に経験してもらえるよう、単位化につなげられないか、検討の必要がある。
- ・ 調布市との連携
現在は、調布市からの依頼に応じての活動がほとんどであるが、今後は大学から企画を投げかけられるような体制を整える必要がある。また、調布市に限るのではなく、企業等でも連携ができないか探るべきであろう。
- ・ インターネット配信による社会との繋がり強化
学内企画（マスタークラス、特別講座、試演会など）、学外企画（卒業演奏会やオーケストラ定期演奏会など）それぞれ、部分的でも学校HPからインターネット配信し、活動を社会に公開することが、非常に重要だと考えられる。これにより、大学の活動が海外の音楽関係者にダイレクトに伝えることができる。また、大学の活動をより多くの人に見てもらうことで、社会との連携がとりやすくなると考えられる。

3. 学内意見聴取について

3.1 点検内容と結果

本学では教育力の向上や教育環境の改善を図るため、多面的評価の一環として、随時学生からの意見聴取を行っている。例えば、4月の新学期オリエンテーション時に行う学生アンケートや授業アンケートなどである。ここでは、今年度から開始した学生アンケートの実施と、その結果を踏まえた今年度の取り組みについて点検した。

(1) 回答率

回答率は、2年生が77%、3年生が84%、4年生が61%であり、学生の声が十分反映されていると考えられる。アンケートの内容は以下のとおりである。

在 校 生 ア ン ケ ー ト

新学年の始まりに際し、皆さんの学校生活での満足度を聞かせてください。

Q 1. 学年は? ⇒ 2 : 2年 3 : 3年 4 : 4年以上

Q 2. 専攻は? ⇒ 1 : ピアノ 2 : 弦楽器 3 : 管打ハプ 4 : 声楽 5 : 古楽器、作曲、音楽学、指揮

Q 3. コースは? ⇒ 1 : Aコース (桐朋女子音楽科出身) 2 : Bコース

Q 4. 昨年度の専攻実技の取り組みに満足していますか?

1 : 全く満足していない 2 : あまり満足していない 3 : ほぼ満足 4 : とても満足

Q 5. 昨年度、専攻実技以外で特に力を入れて取り組んだことは何ですか。該当するものに「○」をつけてください。

1 : 授業 (音楽理論)	6 : 友人との交流
2 : 授業 (SHM)	7 : 学外での活動
3 : 授業 (その他の専門科目)	8 : 将来のための学外での勉強 (資格をとるなど)
4 : 授業 (語学)	(具体的に)
4 : 副科実技	9 : その他
5 : アンサンブル、オーケストラ	(具体的に)

Q 6. 総合的にみると、これまでの学校生活に満足していますか?

1 : 全く満足していない 2 : あまり満足していない 3 : ほぼ満足 4 : とても満足

Q 7. 本校で学ぶ目的は何ですか? 該当するもの「○」をつけてください。(2つ以内)

1 : 演奏家・音楽家になるため	5 : 社会で役立つ知識を身につけるため
2 : 教員の資格を取り、教職につくため	6 : 現時点では特に思いつかない
3 : 一般企業を含め就職するため	7 : その他
4 : 専門知識・技能を高めるため	(具体的に)

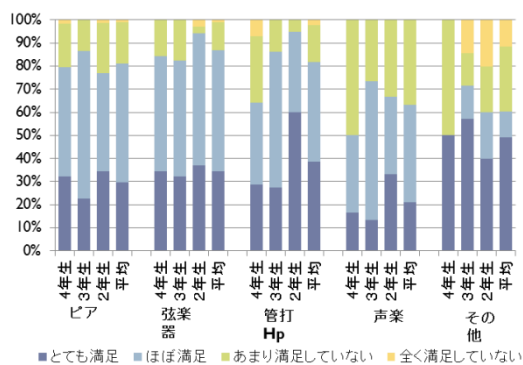
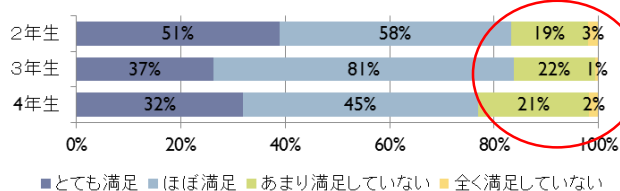
Q 8. あなたはこの新たな1年間で、何を探求し、どんなことに取り組みたいですか?

Q 9. また、そのためにも桐朋学園大学はどのような学校であって欲しいですか? (実現可能、不可能を問わず、書いてください。)

(2) アンケートの結果と分析

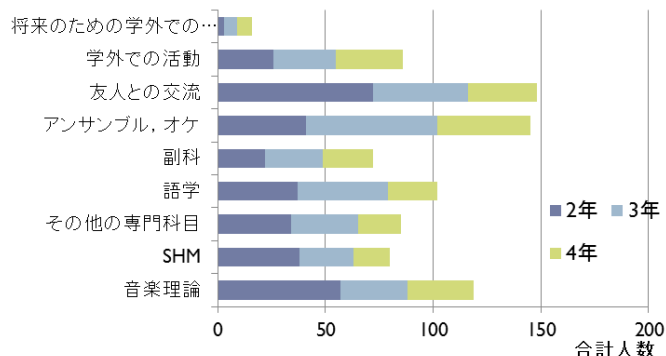
以下は、それぞれの項目の結果である。

ア) 昨年度の実技の取り組みに関して
上級生ほど全く満足できていない学生が多かった。



イ) 実技以外に力を入れたものに関して

全学年を通して、友人との交流やアンサンブル等の個人の枠組みを超えた活動に興味があることが分かった。



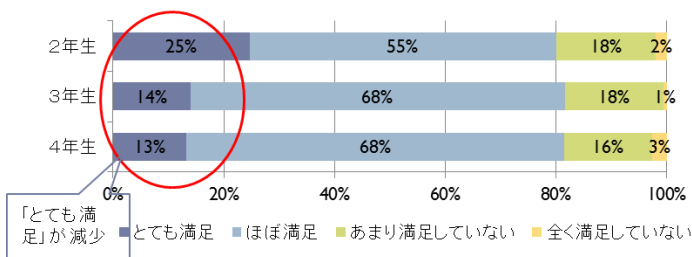
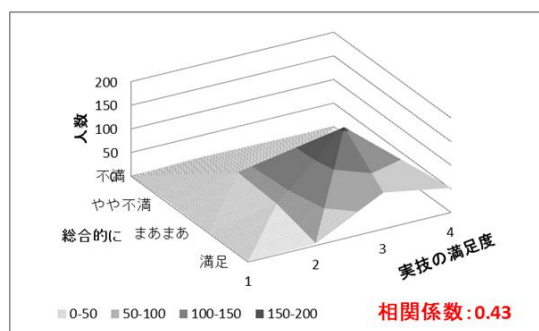
ウ) 学校生活全般についての満足度

◇ 上級生の方が「とても満足」している学生が少なかった。

◇ 「実技の満足度」と「総合的な満足度」の相関を調べたところ、相関係数は 0.43 であり、この2要因間には関連性があることが認められた。

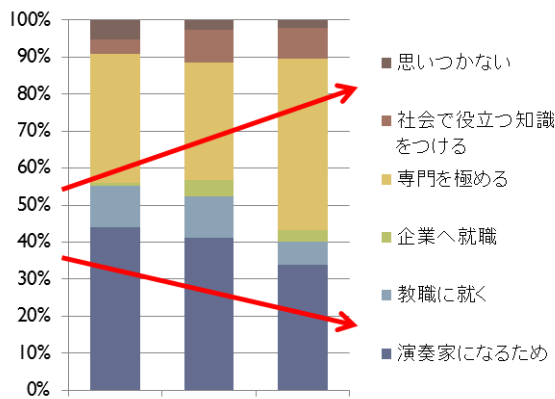
アンサンブルも含め、より一層の実技教育の充実が求められる。

「実技」と「総合的」な満足度の関連性



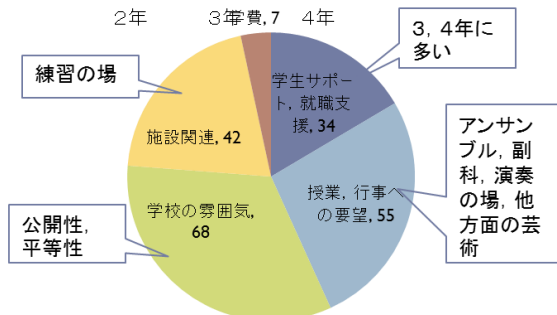
エ) 本校で学ぶ目的に関する意識

上級生になるほど、「演奏家になるため」が減少し、「専門を極める」が増加している。演奏家以外で専門を生かせる道を探っていることがわかる。



オ) 大学への要望に関して

- ◇ 上級生ほど「学生サポート」の要望が多かった。
- ◇ 副科を始め、多方面の芸術を学びたいという希望を持っている。
- ◇ 練習の場をもっと提供して欲しいという要望が多かった。



カ) 結果のまとめ

総じて学年が上がるほど満足度が下がっている。また、学年が上がると、「学校後の社会」への意識が高まっている。学生サポートへの要請が高まるのは、社会へ出る時期が近づいてきている一方で、現実の厳しさを理解することで将来への不安が募ってくることに他ならない。

つまり、もともと演奏家を目指して本学に入学する学生が多いが、徐々に演奏家として生き残っていくことの困難さに気づき、それでも音楽に関わって生きていきたい、という願望を持っている。現実と希望のギャップが浮き彫りになっているといえよう。

すべての学生が演奏家として生計を立てることは無理であることは明白な事実であるが、学校としては、演奏家にならないとしても、音楽大学で学ぶということが人生を豊かにするものである、とか、演奏家以外にも音楽と関わり、もしくは関わらなくとも様々な道があるのだ、ということを示していかなければならない。そのことが、学生のためだけでなく本学の教育をより魅力的なものにすることと同義であると考えらるべきであろう。

単に就職支援にとどまらない、キャリア形成の一環として学生に多様な価値観を提示することがこれまで以上に本学にも求められてきていることが分かる。

(3) 結果を踏まえての今年度の取り組み

学生からの要望に応じて実施した改善例は、以下のものである。

- ・ 桐朋芸術短期大学との授業連携

「日本音楽」の分野や「演劇」分野の授業を開放してもらい、履修できるように整えた。前期は66件、後期は20件の登録があり、大変好評であった。

- ・ 調布キャンパス開校

9月より調布キャンパスが開講した。調布キャンパスではレッスンは副科のみとし、学生への練習場所として提供することを優先させた。仙川キャンパスと同様に施設の開放を行った結果、夜間時間帯の部屋が不足することはなくなった。

3.2 今後の課題

優秀な音楽科を育てることが本学に課せられたもっとも重大なミッションであることには変わりはないが、一握りの学生だけが音楽とともに生きていくのではない。本学を目指す学生に魅力ある学校であり続けるために、さらに進化する必要がある。今後は次の項目を検討していくべきだろう。

- ① 大学院の設置を目指す
- ② 調布キャンパスの整備に次いで、本学のルーツである仙川キャンパスの整備：教室や練習室の充実
- ③ 優秀な教授陣の確保による教育力の維持・向上：年俸制の導入など雇用の多様化により有用な人材の確保をしやすくする
- ④ 毎年の在校生対象のアンケート調査
- ⑤ 授業アンケートの実施
- ⑥ 学生会館入居者向けアンケートの実施

III. 自己評価

国際交流と社会との連携に関しては、新しい提携校と交換留学を実施していること、継続的に調布市と連携し企画に参加していることは、望ましいことと評価できる。今後は、ますます大学の社会貢献の役割を求められるであろう。地域貢献に限らず、さまざまな形で社会貢献を進めている必要がある。

在校生アンケート等多面的評価を行ったこと、また、キャリア支援センターでの活動等、その声に応えるために学生サービスを充実させたことも評価できる。今後は、学校運営側からの一方通行的な見方に偏らないよう留意を要する。そのためには今後とも学内外の多様な意見を聴取し多面的に評価し、その結果を学生へフィードバックする体制を整えるべきである。

一方で、現在のように課題がたくさんある状態の時は、優先順位を決めて、着実に物事を進めていく必要がある。いかに問題に気付くか、その解決策をどこに見つけるか、実際にどのように動くか、動いた結果をどのように点検していくか。「企画倒れ」にならないためにも、着実にできることをしっかりと見極めた上で、できることはスピード感を持って行う努力をしたい。